

NTTデータにおけるアシュアランスケースの活用

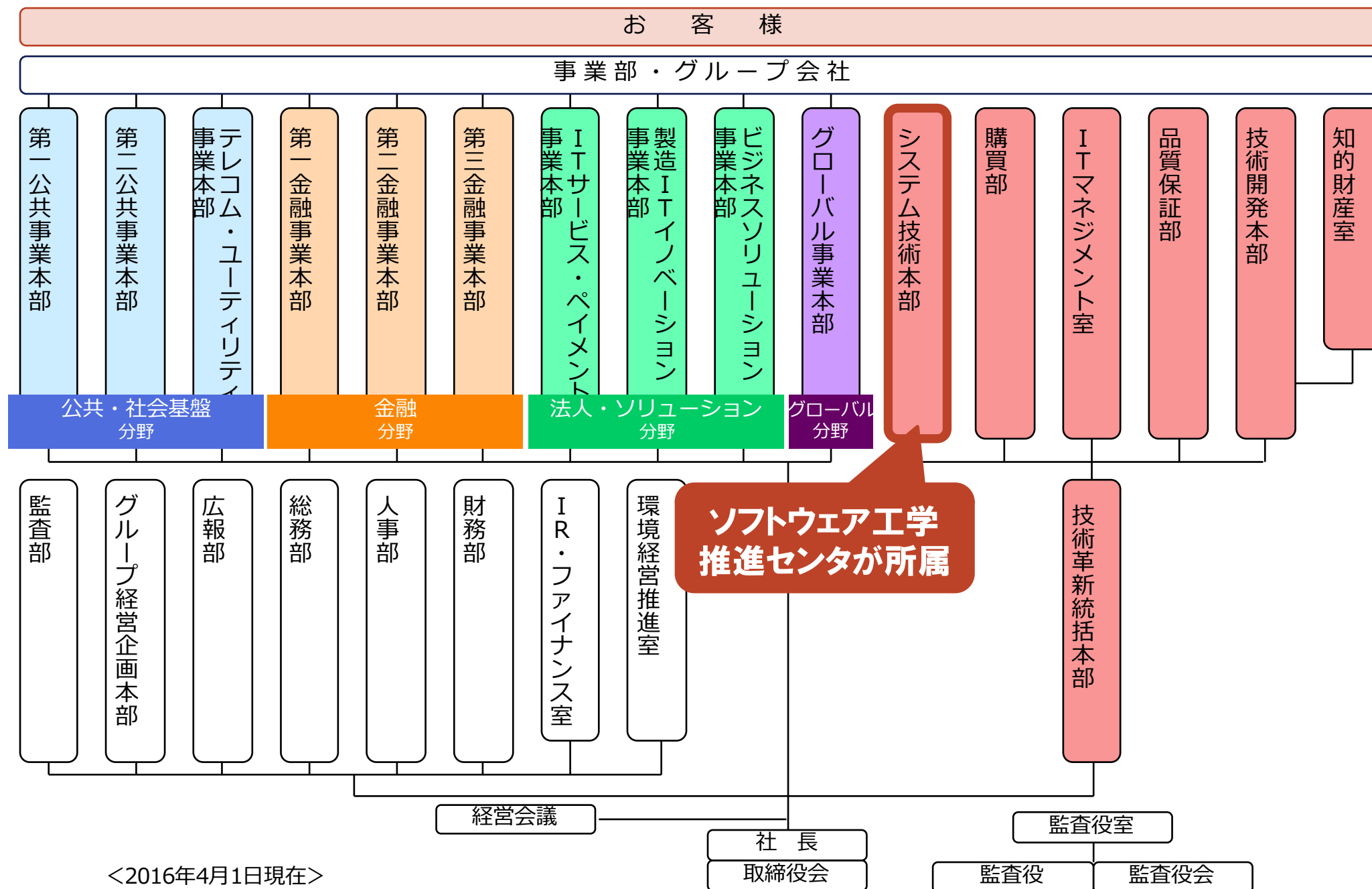
2016年4月22日
株式会社NTTデータ
システム技術本部 生産技術部 ソフトウェア工学推進センタ
町田 欣史

1. 私たちの取り組み(AP基盤チェックサービス)
2. AP基盤チェックサービスへのアシュアランスケースの適用
3. 今後の計画



1. 私たちの取り組み(AP基盤チェックサービス)

1.1 NTTデータ 組織図(2016年4月1日)

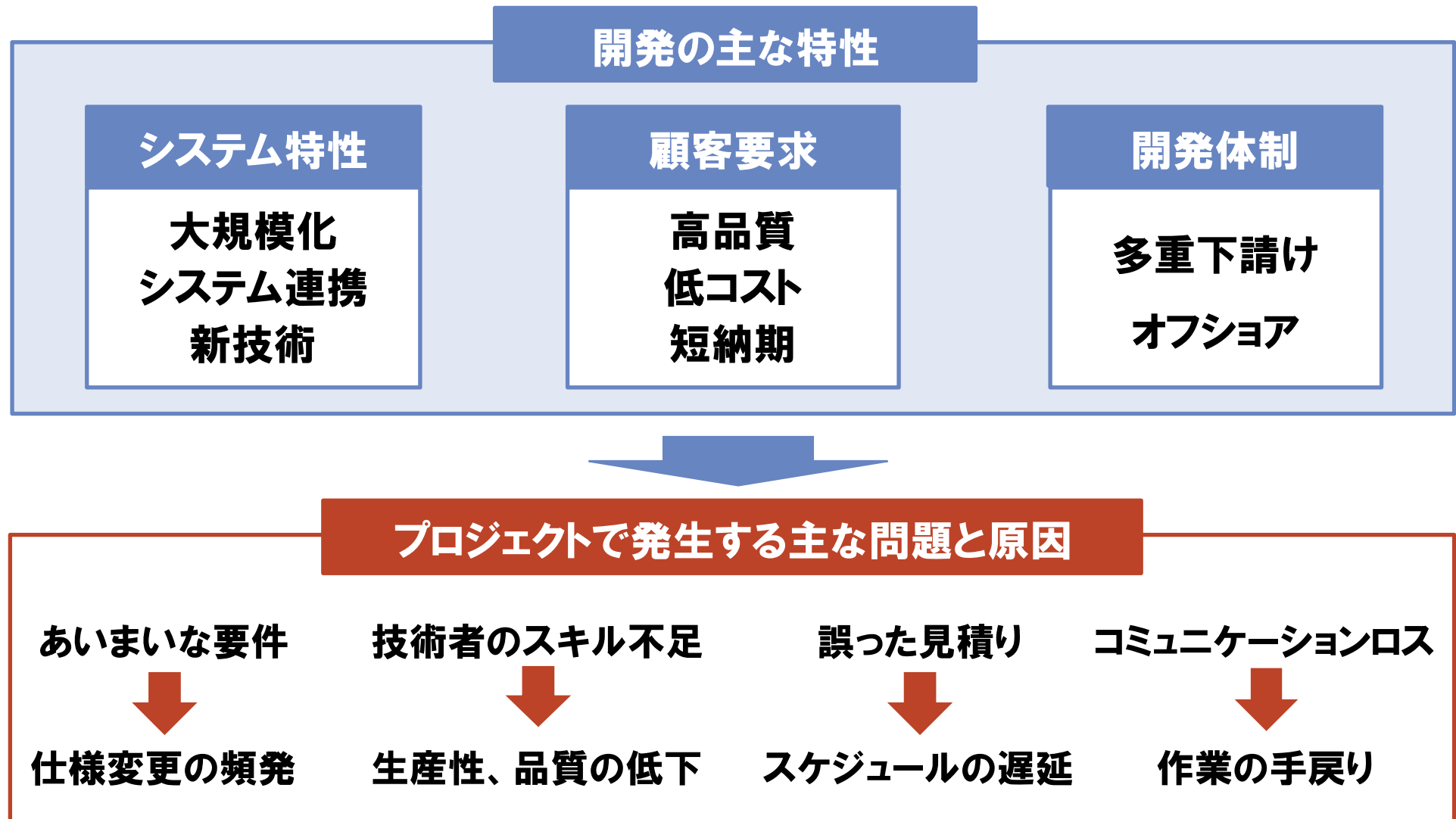


<2016年4月1日現在>

グローバルで競争力のあるソフトウェア生産技術を開発し、効果を実証し、NTTデータグループに広く展開しています。

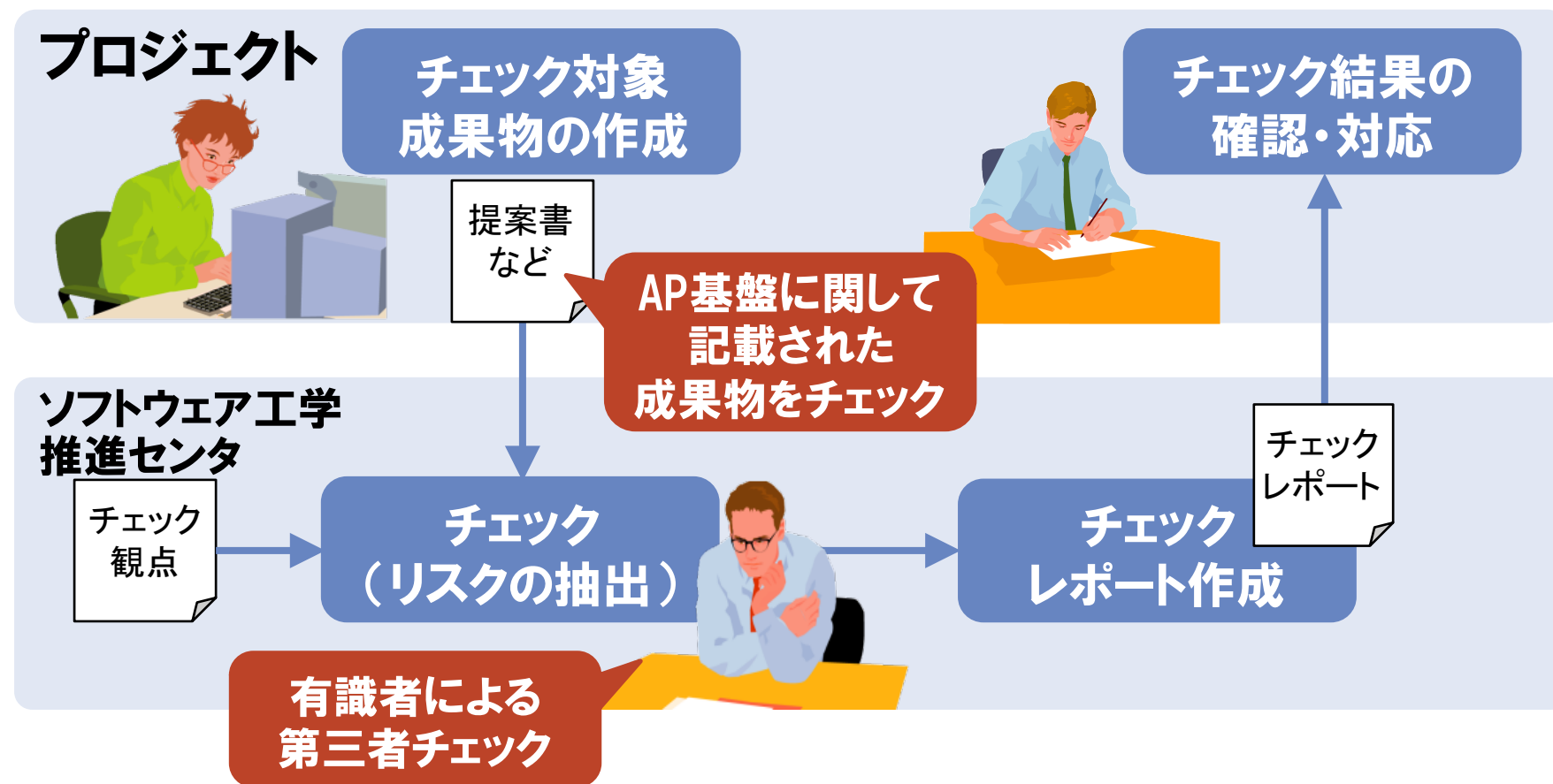
	取り組みテーマ	内 容
1	生産技術革新	ソフトウェア開発を自動化するツールを整備し、生産性と品質の向上を実現
2	レガシーモダナイゼーション	大規模レガシーモダナイゼーションを成功させる 方法論やツールを開発
3	プロジェクト支援・検証	上記の技術をはじめとした先進的な技術によってプロジェクトの品質や生産性向上のための支援、検証を実施

大規模・複雑化するシステム開発で様々な問題が発生



AP基盤に関するリスクを有識者がチェック

AP基盤チェックサービス



2011年からサービスを開始し、毎年数十プロジェクトのチェックを実施

業界標準や規格を参考にしてチェック観点を整備

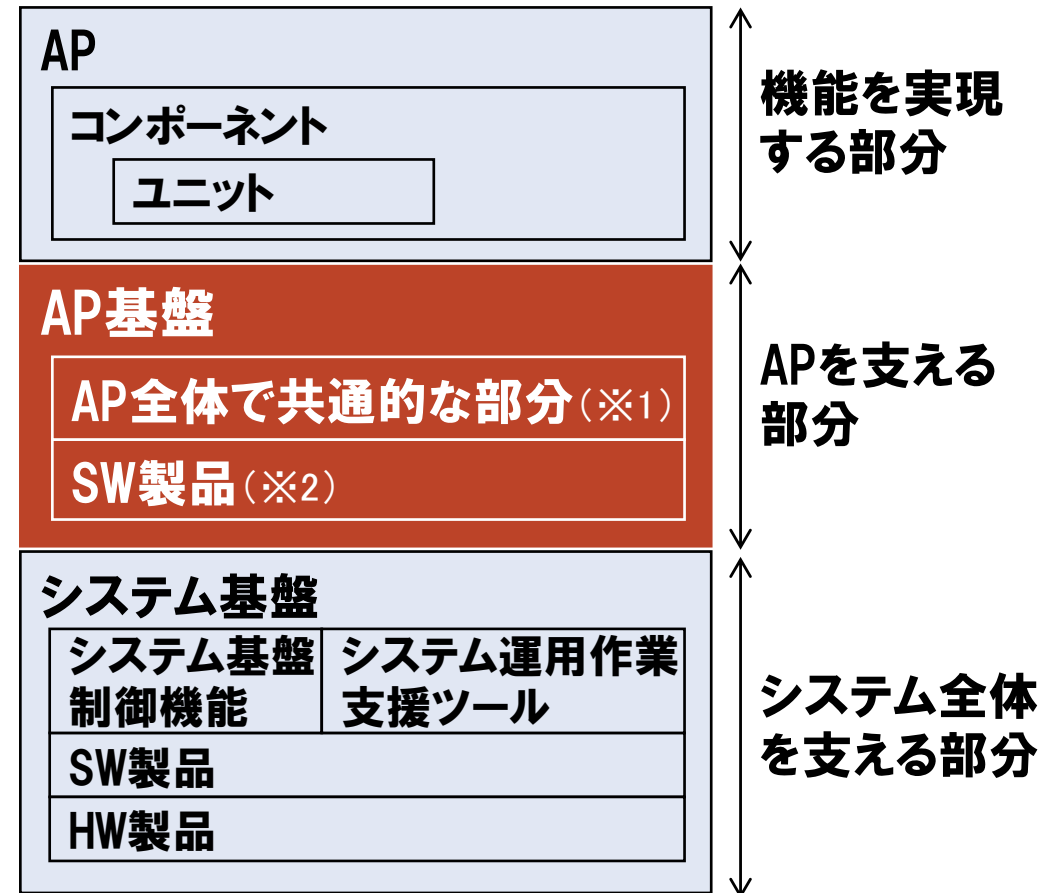
実現すべき要件・制約

- ◆ スコープ
- ◆ 機能要件
 - ・ データモデル
 - ・ システム化機能
 -
- ◆ 非機能要件
 - ・ 可用性
 - ・ 性能
 - ・ 拡張性
 - ・ 運用・保守性
 -
- ◆ 制約事項
 - ・ 開発制約
 - ・ 技術制約
 -

チェック観点の例

- ・ システムの各処理方式は非機能要件を満たすか
- ← 妥当性確認 →
- ・ 機能要件を満たすAP構成となっているか
 - ・ 実現手段の前提となる要件や制約は定義されているか

システムの構成



(※1) 画面遷移の制御、リモートバッチの制御、電文の制御、ログ出力など。
 (※2) APフレームワーク、ERPや帳票パッケージなどのうち、APと直接関連する部分。

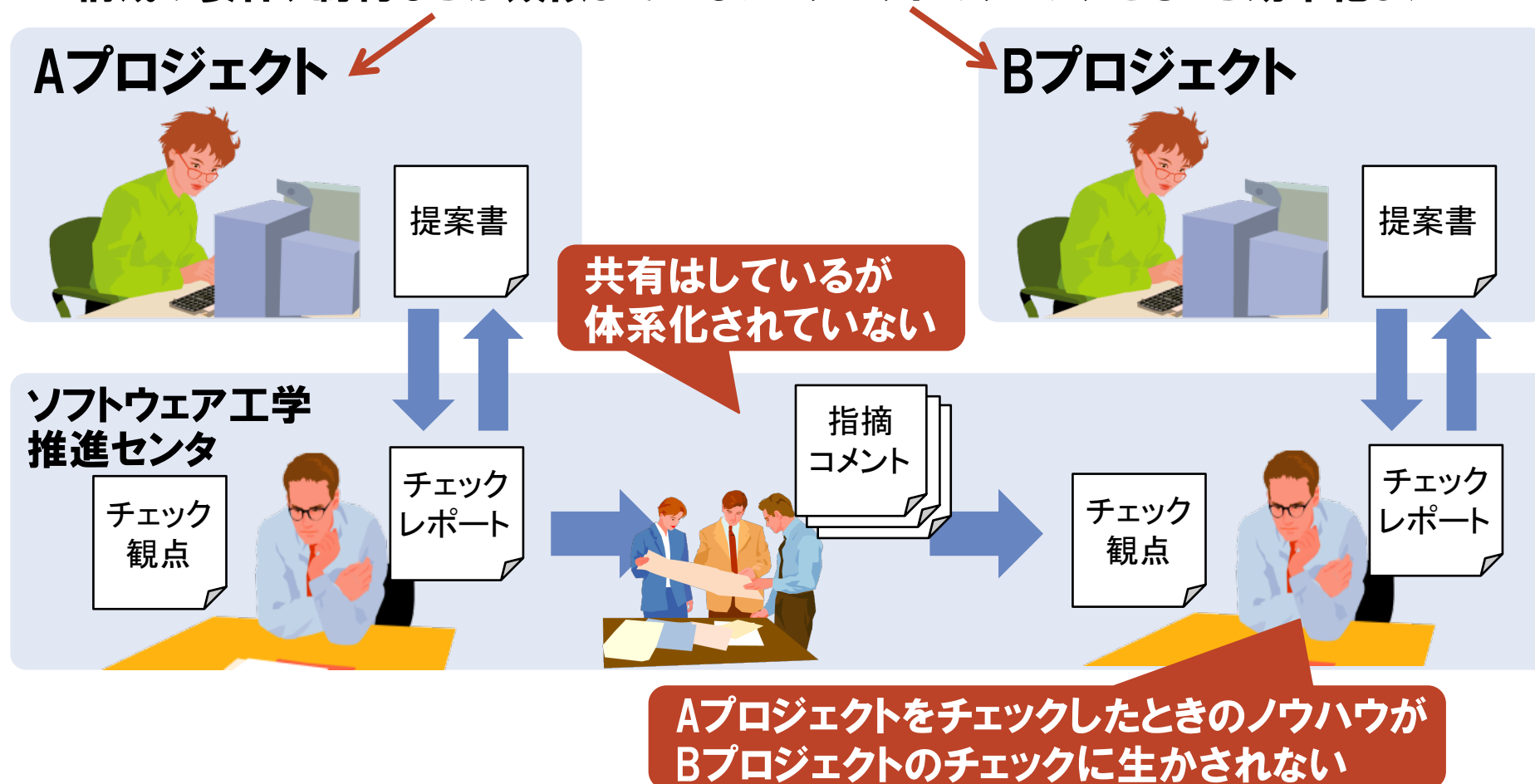


2. AP基盤チェックサービスへのアシュアランスケースの適用

各プロジェクトのチェック結果を体系的に共有して再利用したい

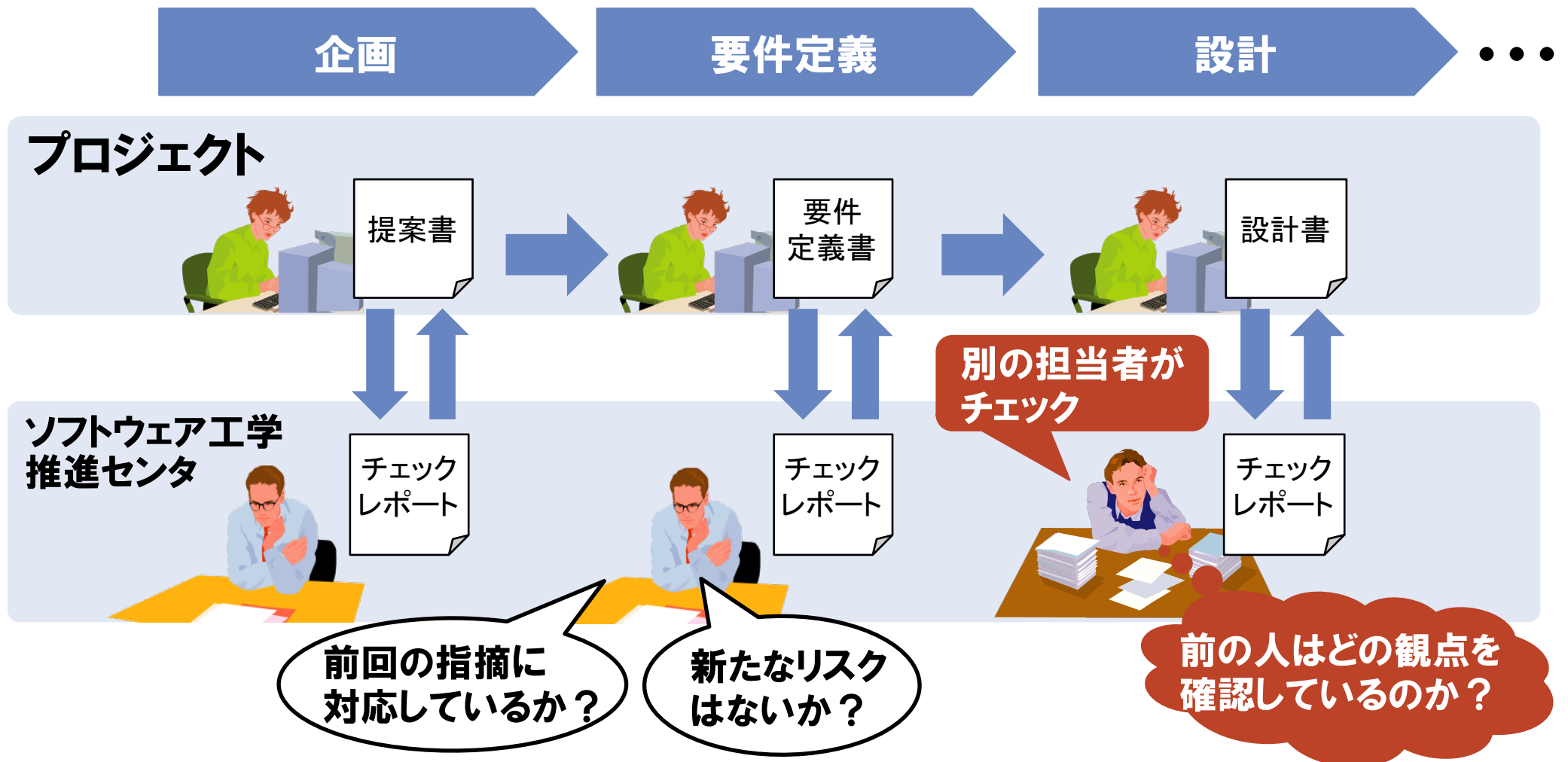
複数の異なるプロジェクトに対してチェックをする場合

AP構成や要件、制約などが類似しているプロジェクトのチェックをもっと効率化したい



チェックの経緯を記録してリスクへの対応状況を確認したい

1つのプロジェクトに対して継続的に状況をモニタリングする場合



D-Caseでチェックの過程を可視化して蓄積

共通的に使えるノウハウを蓄積

汎用化したD-Caseを
ひな形として活用

チェック
観点

D-Case
ひな形

チェックの
ノウハウ

可視化

D-Case

提案書
など

チェック
レポート

ノウハウの例

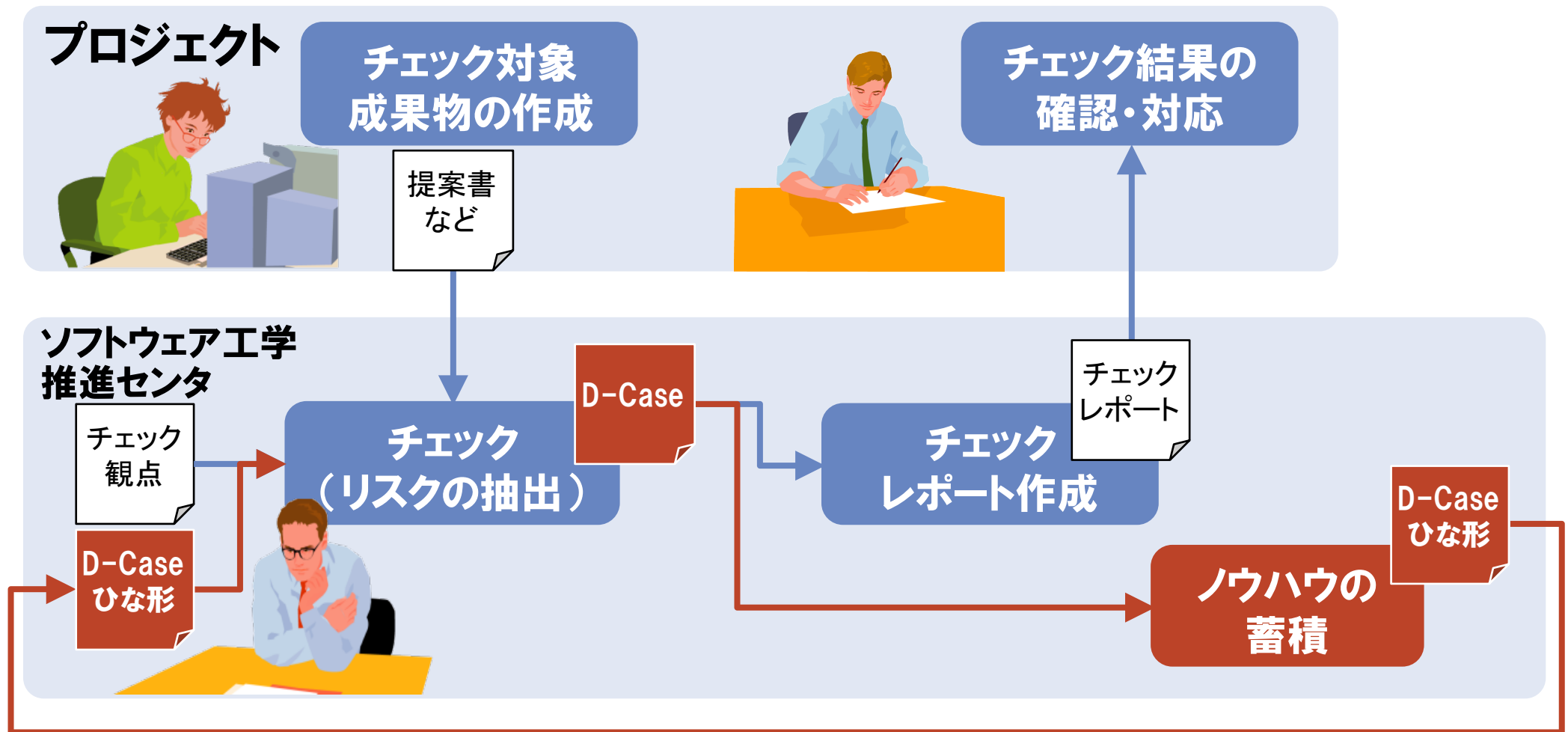
このシステムはどの観点を重点的に見るべきか？

この観点は具体的に何を確認すればよいか？

リスク対策の有無をどうやって判断したか？

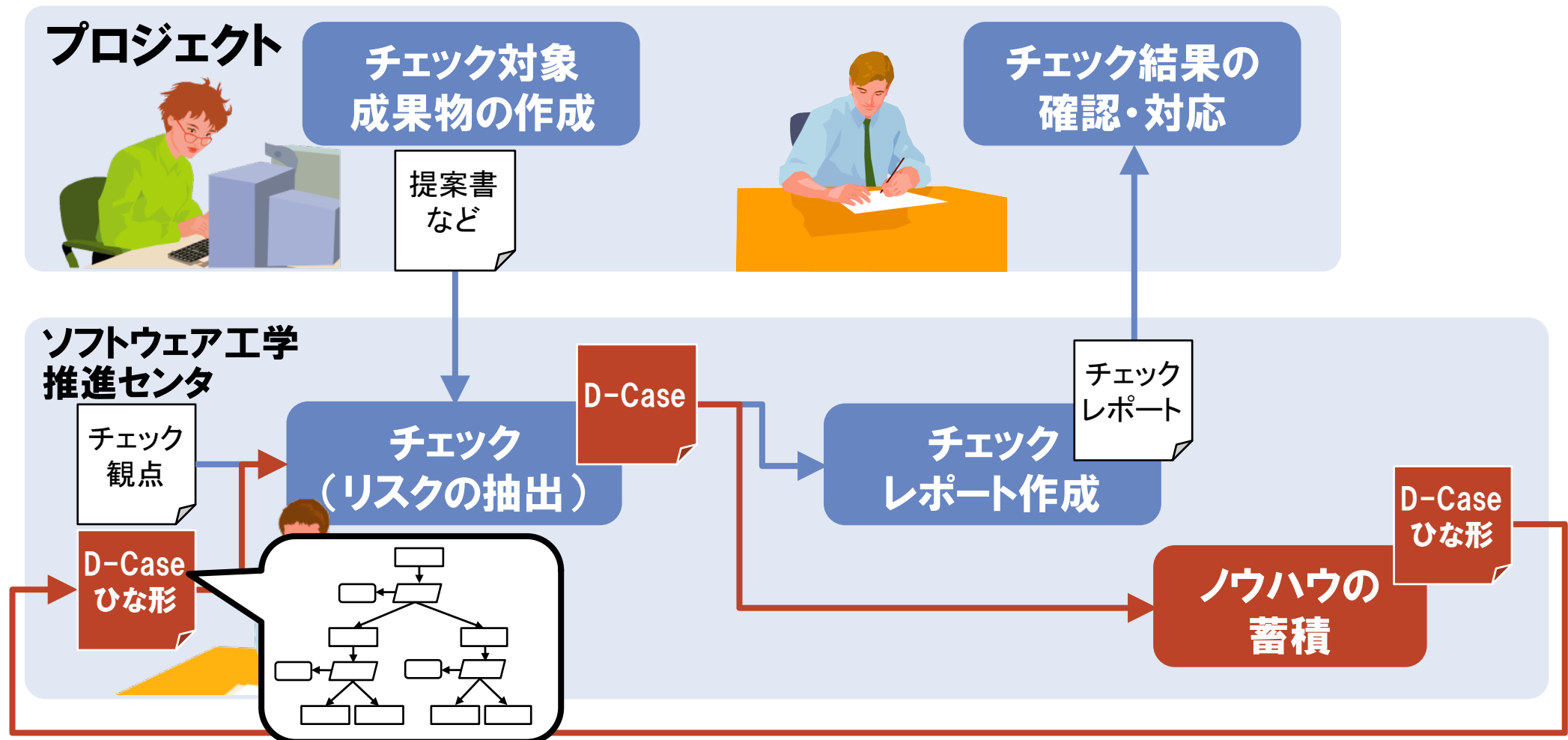
D-Caseを蓄積して過去のチェックノウハウを活用

複数の異なるプロジェクトに対してチェックをする場合



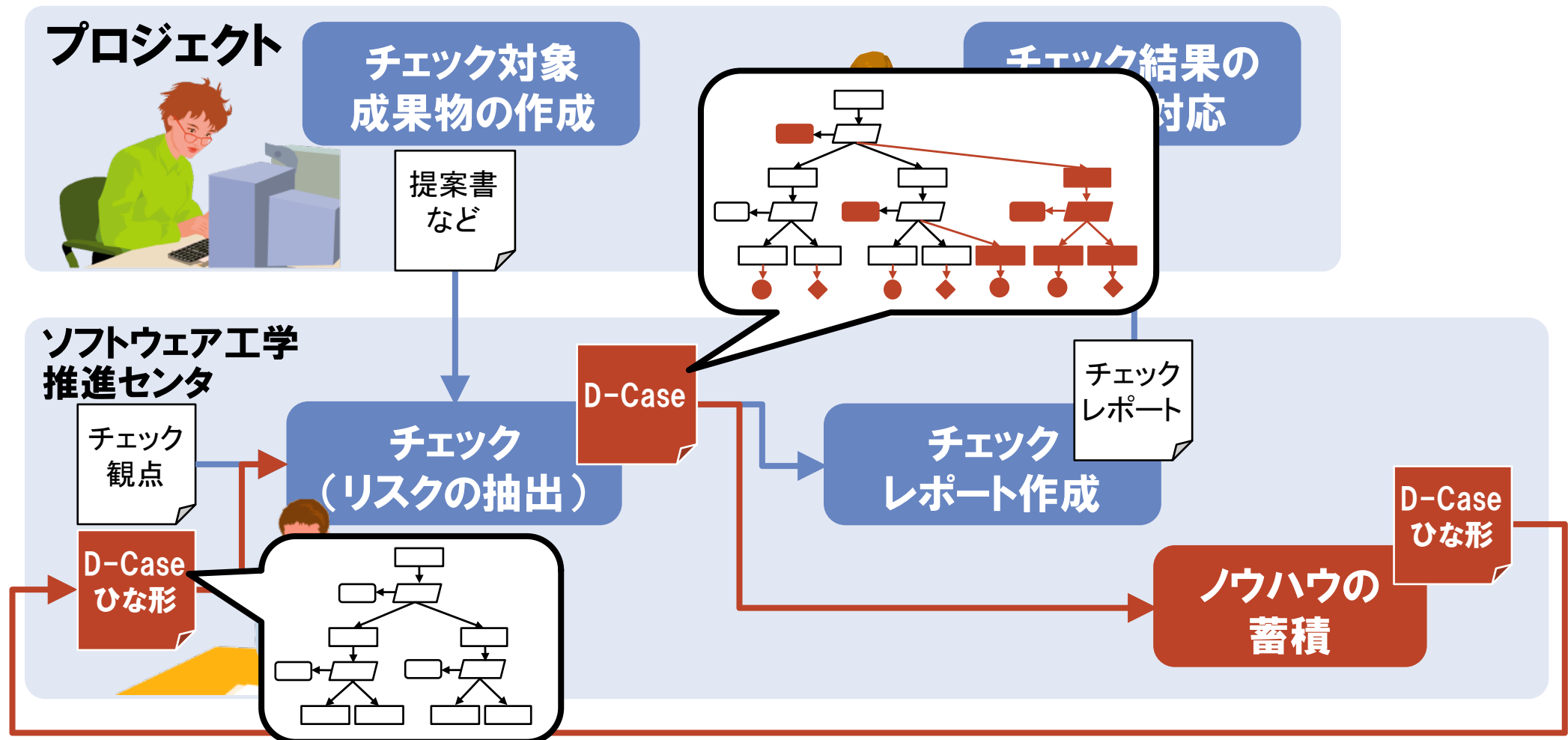
D-Caseを蓄積して過去のチェックノウハウを活用

複数の異なるプロジェクトに対してチェックをする場合



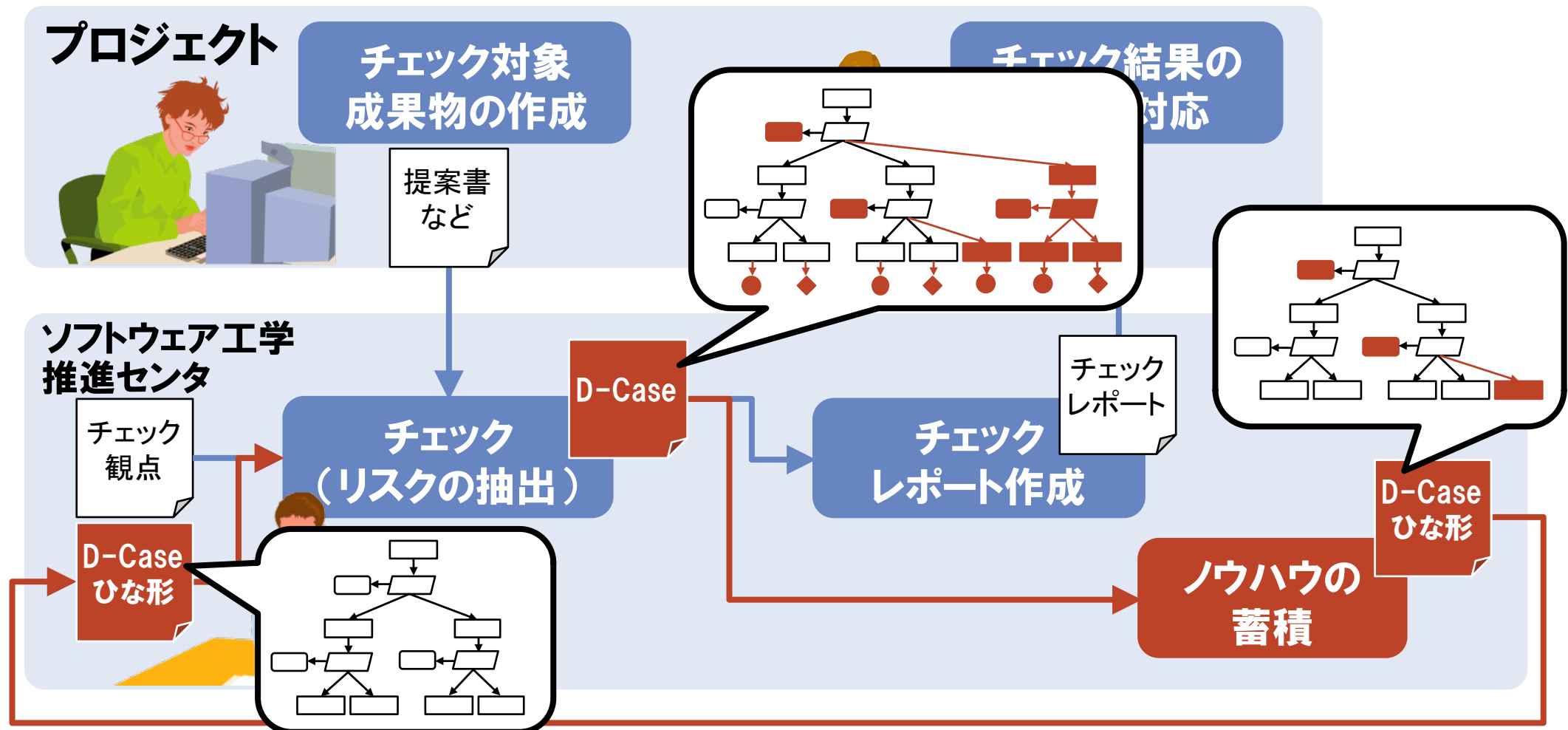
D-Caseを蓄積して過去のチェックノウハウを活用

複数の異なるプロジェクトに対してチェックをする場合



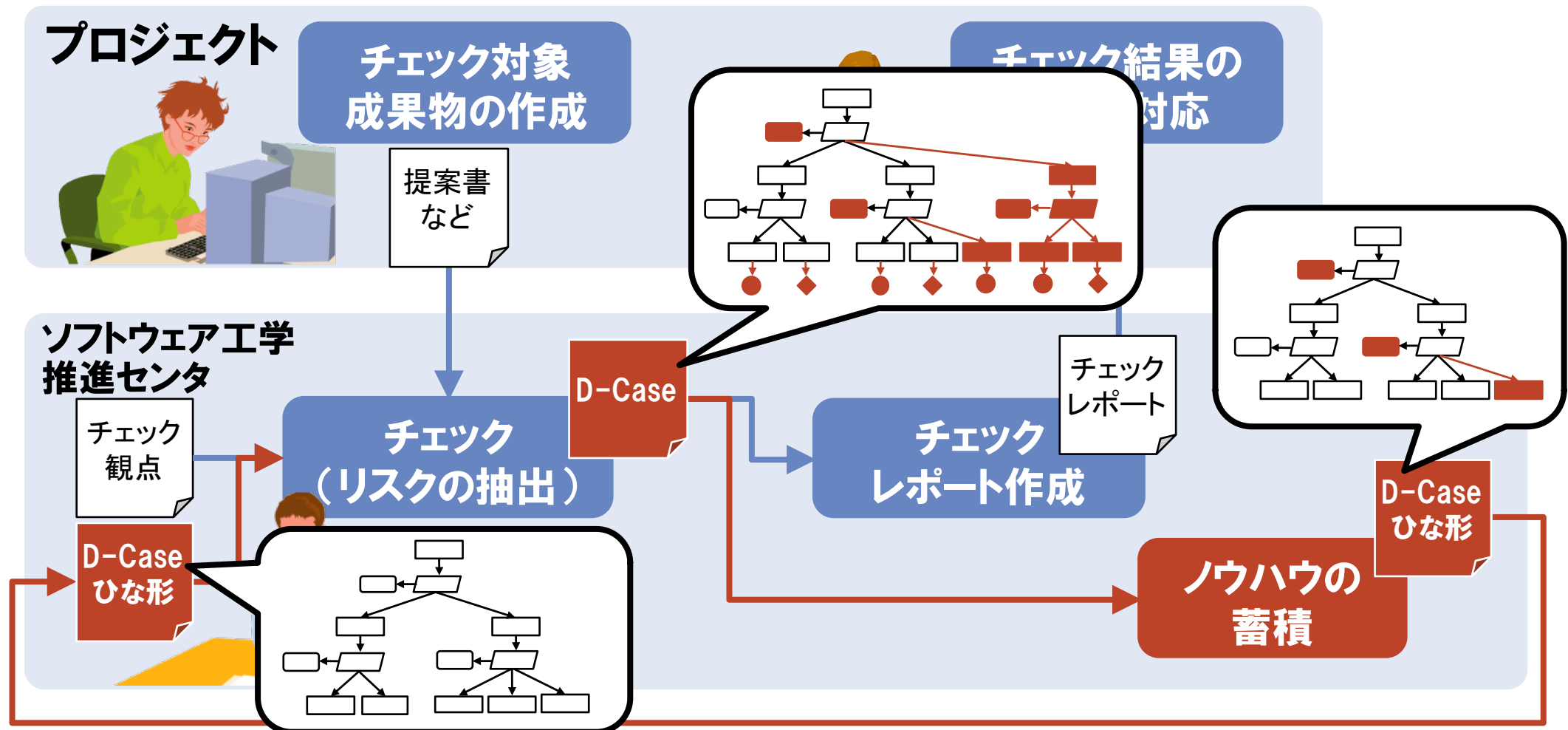
D-Caseを蓄積して過去のチェックノウハウを活用

複数の異なるプロジェクトに対してチェックをする場合



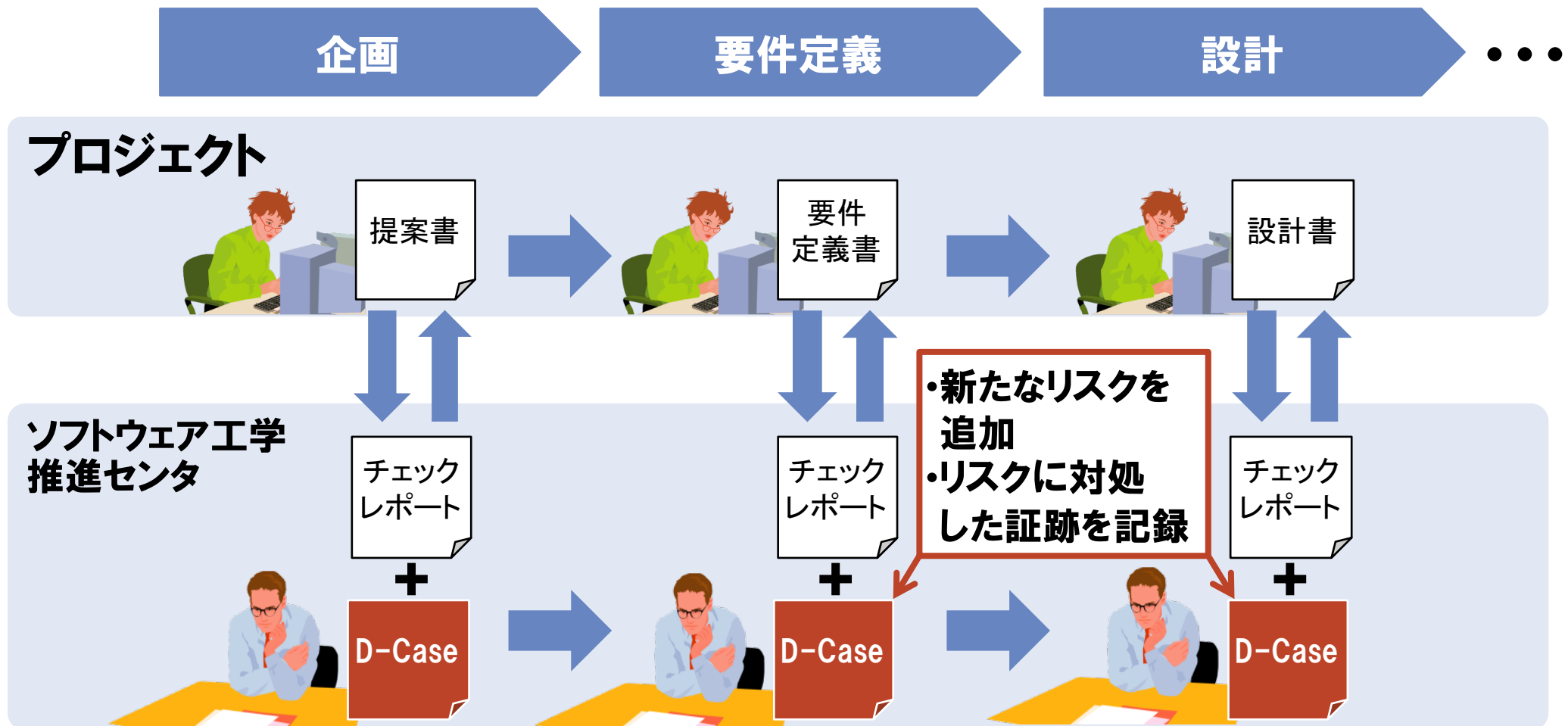
D-Caseを蓄積して過去のチェックノウハウを活用

複数の異なるプロジェクトに対してチェックをする場合



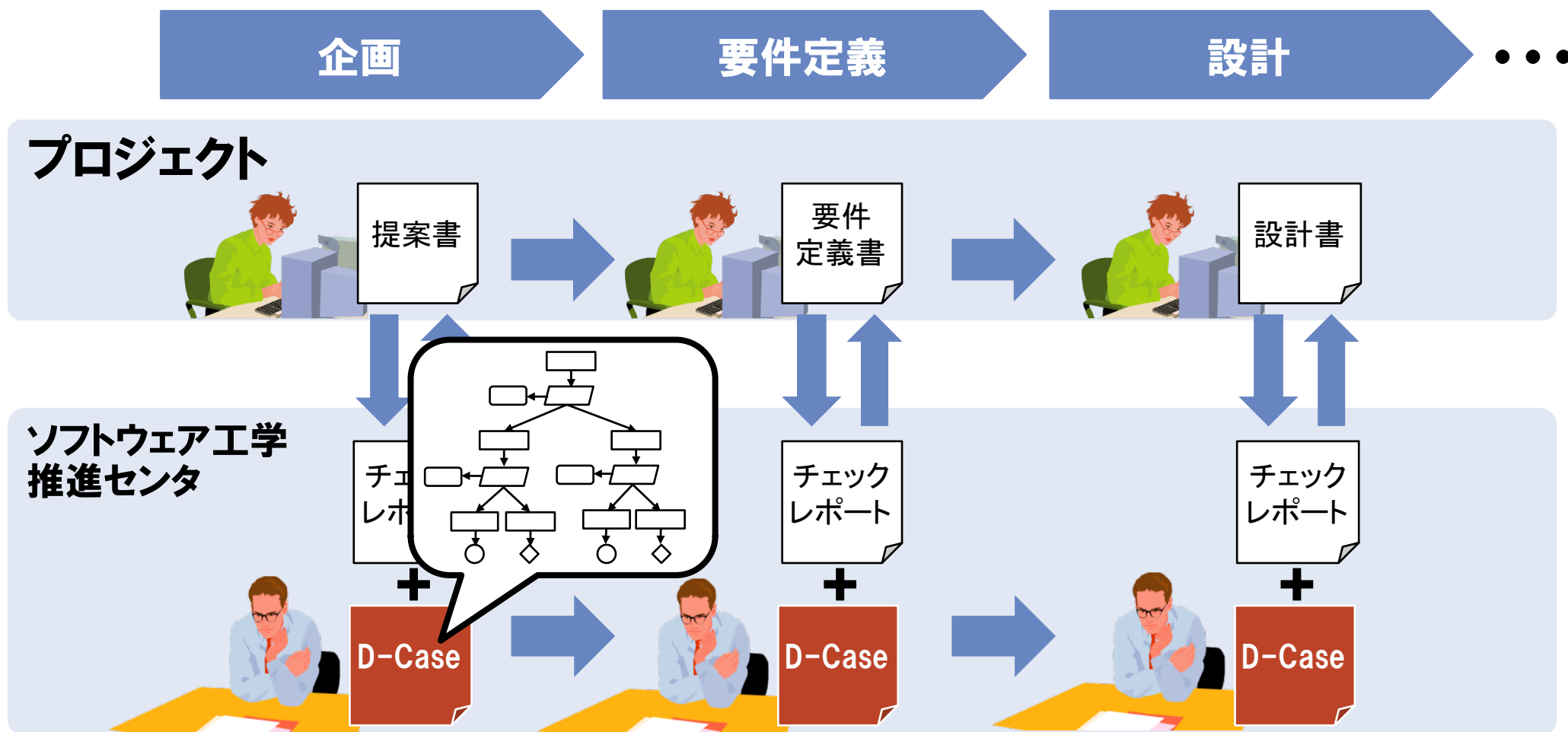
D-Caseを使ってリスクへの対処の状況をモニタリング

1つのプロジェクトに対して継続的に状況をモニタリングする場合



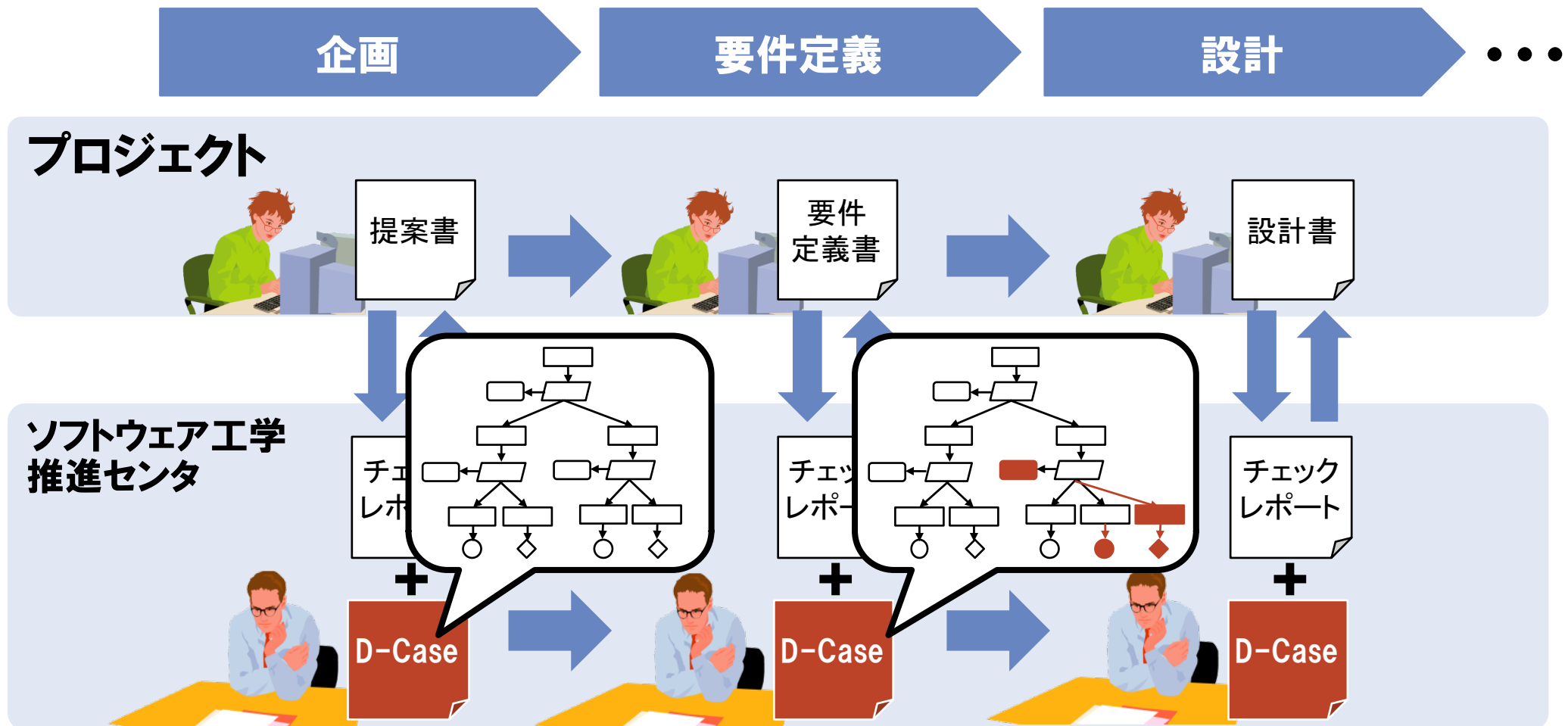
D-Caseを使ってリスクへの対処の状況をモニタリング

1つのプロジェクトに対して継続的に状況をモニタリングする場合



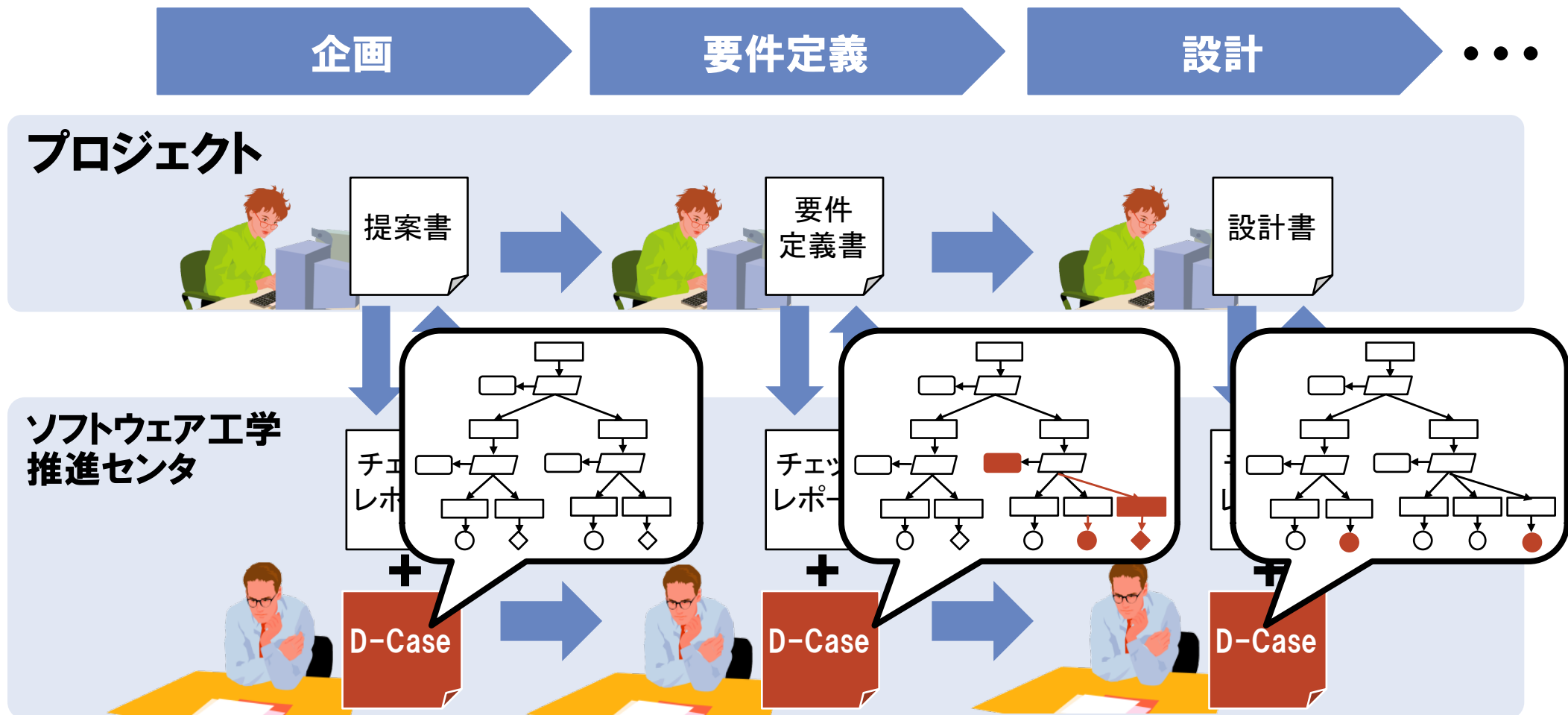
D-Caseを使ってリスクへの対処の状況をモニタリング

1つのプロジェクトに対して継続的に状況をモニタリングする場合

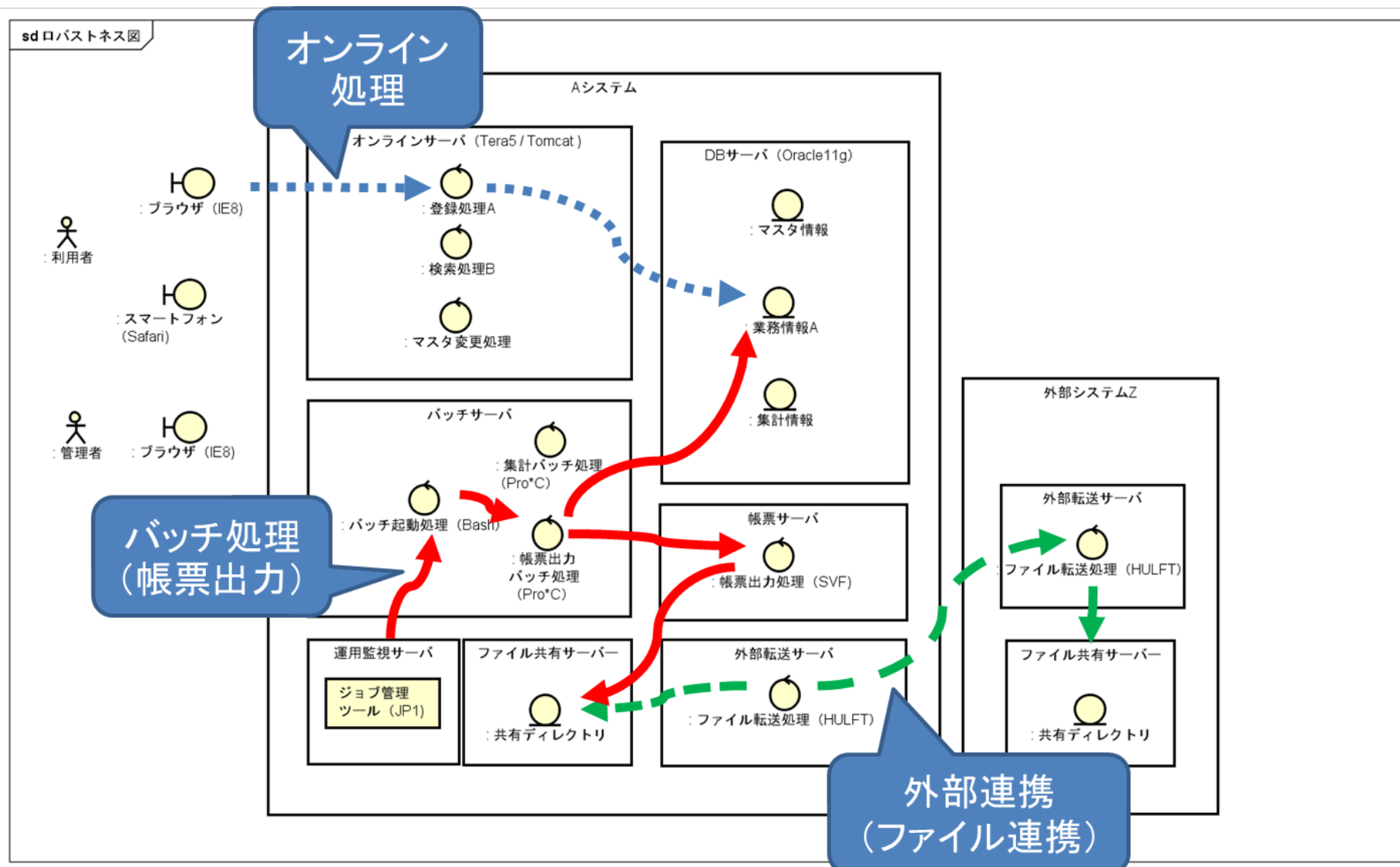


D-Caseを使ってリスクへの対処の状況をモニタリング

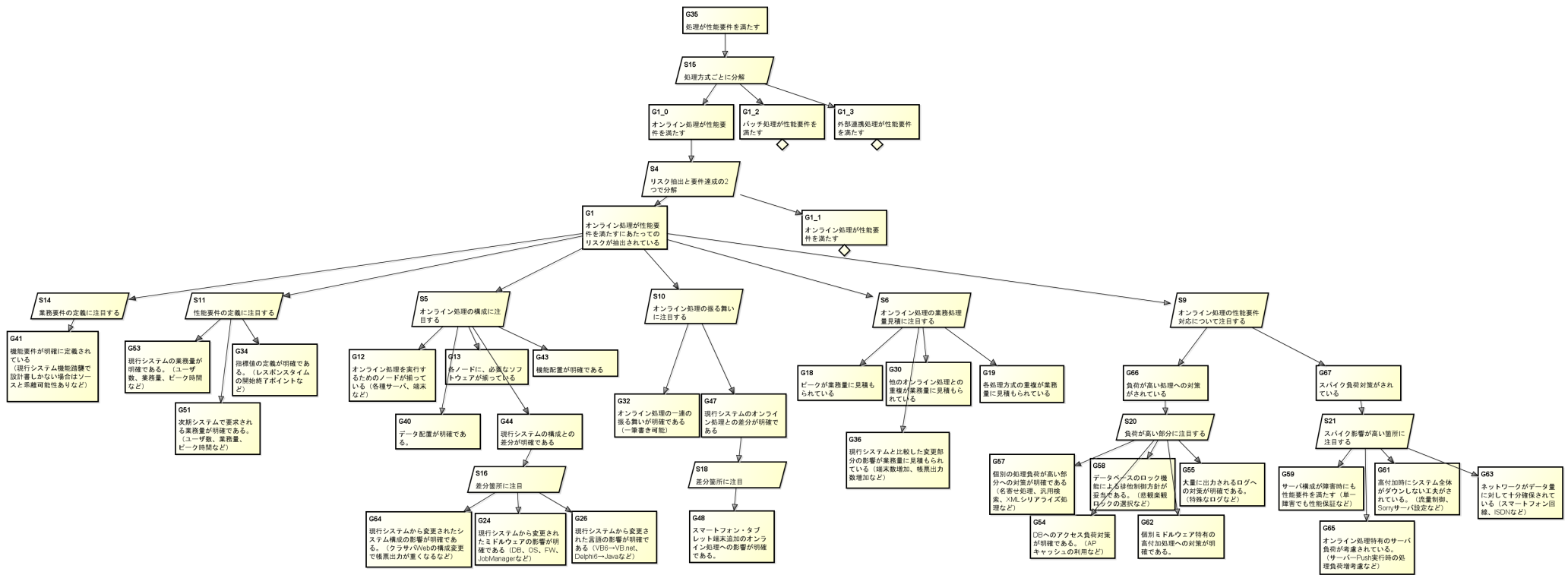
1つのプロジェクトに対して継続的に状況をモニタリングする場合



想定するシステムの構成

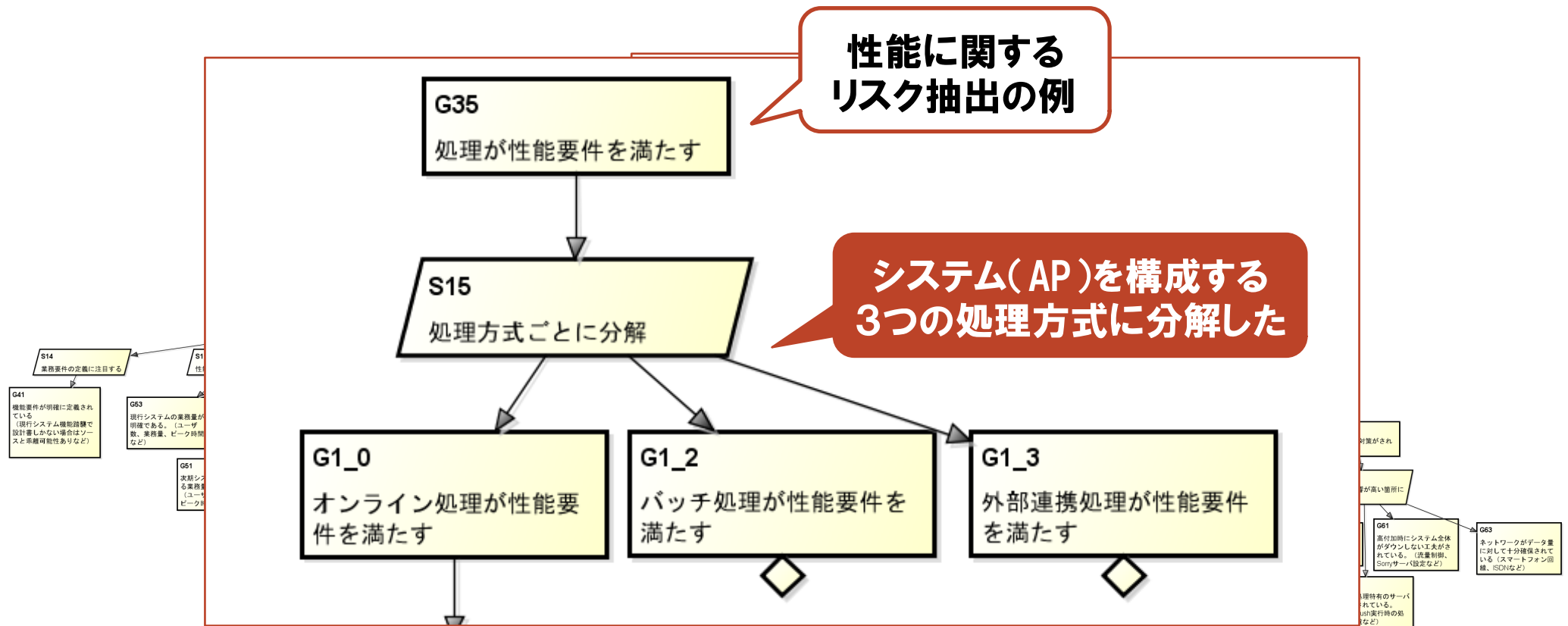


作成したD-Case

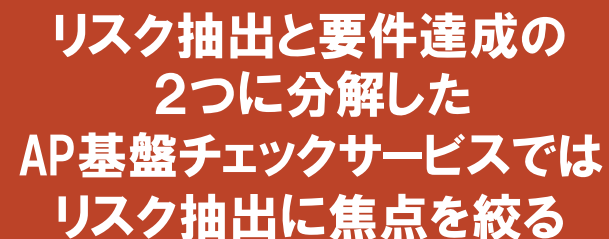


※前提(コンテキスト)は省略しています

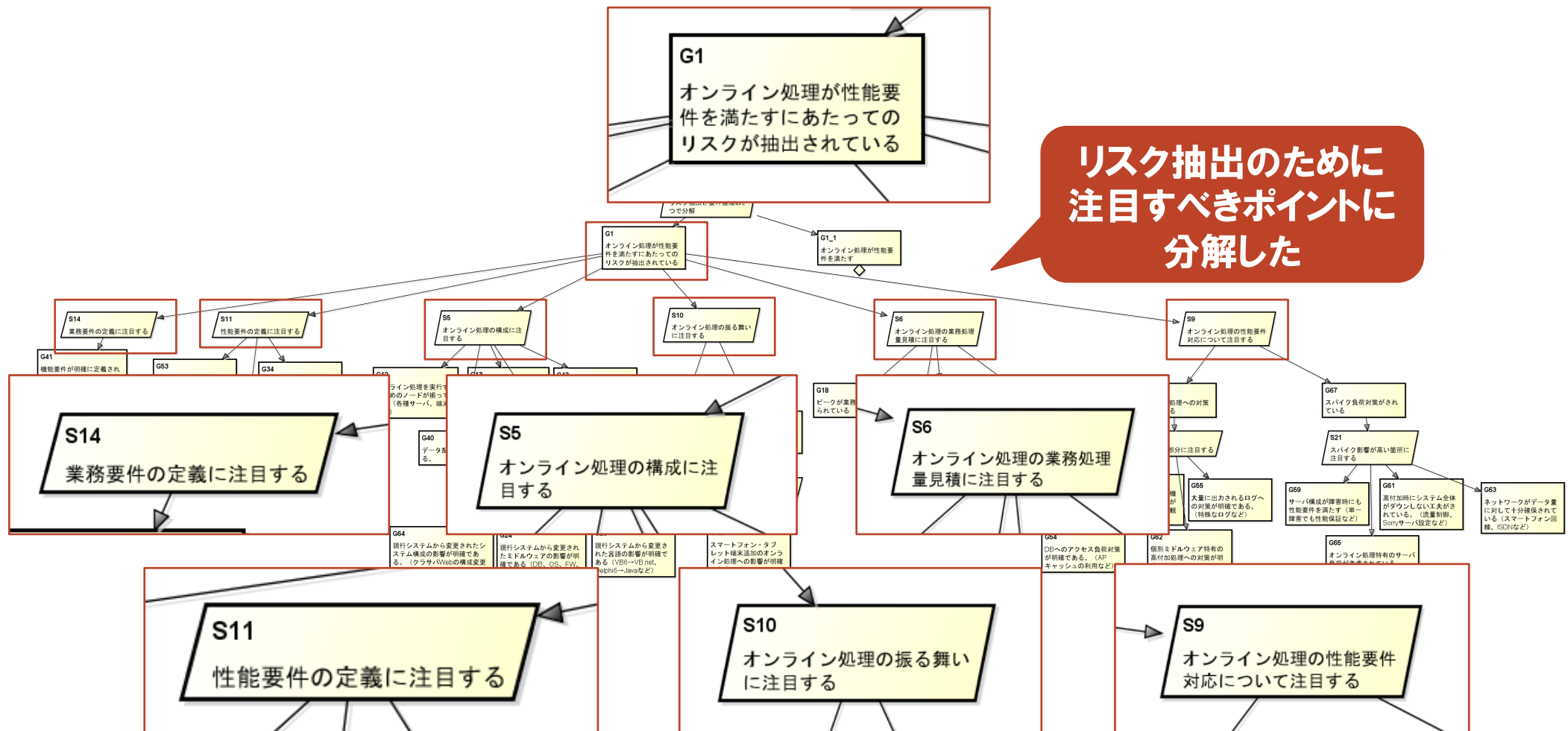
作成したD-Case



オンライン処理の 性能に関する例



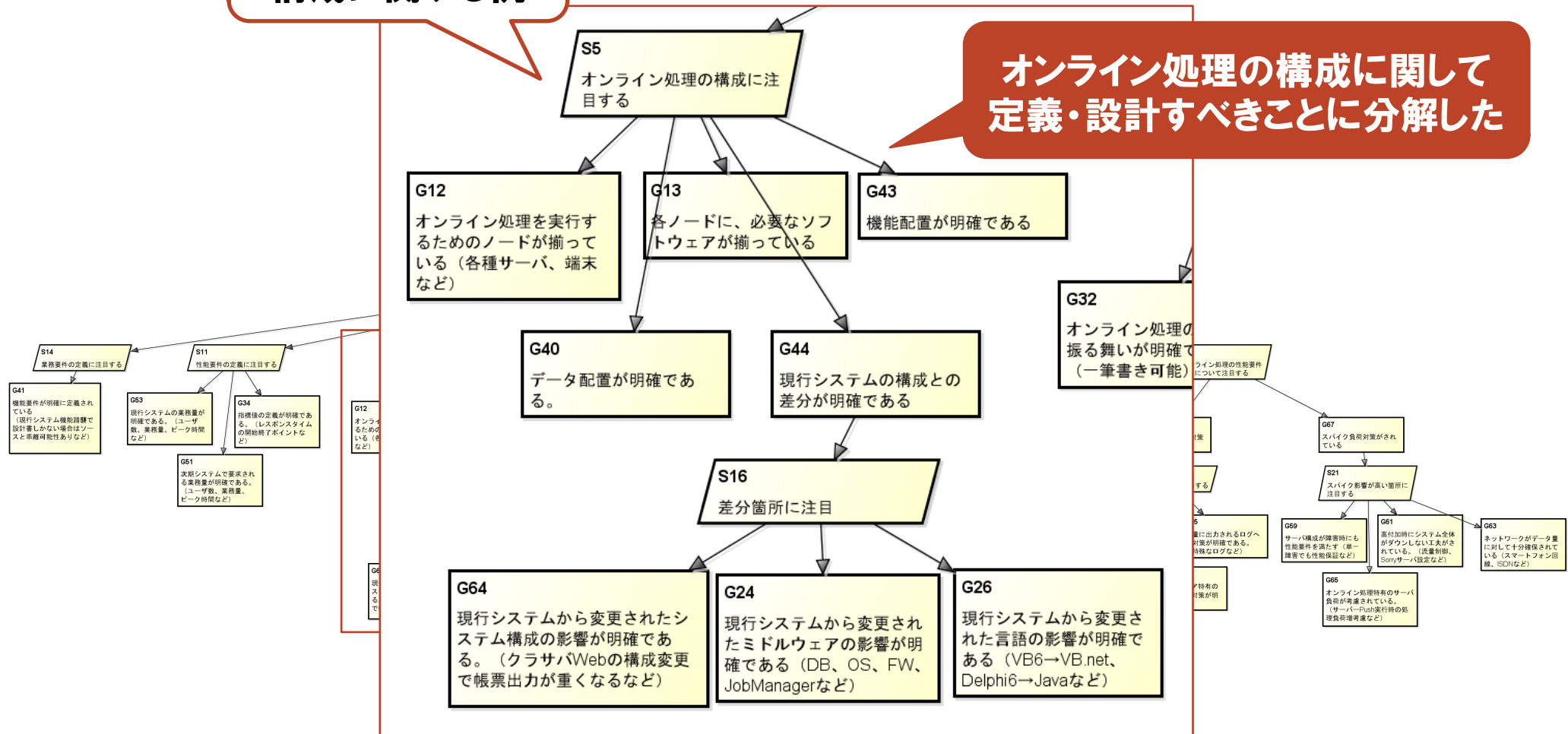
作成したD-Case



オンライン処理の 構成に関する例

作成したD-Case

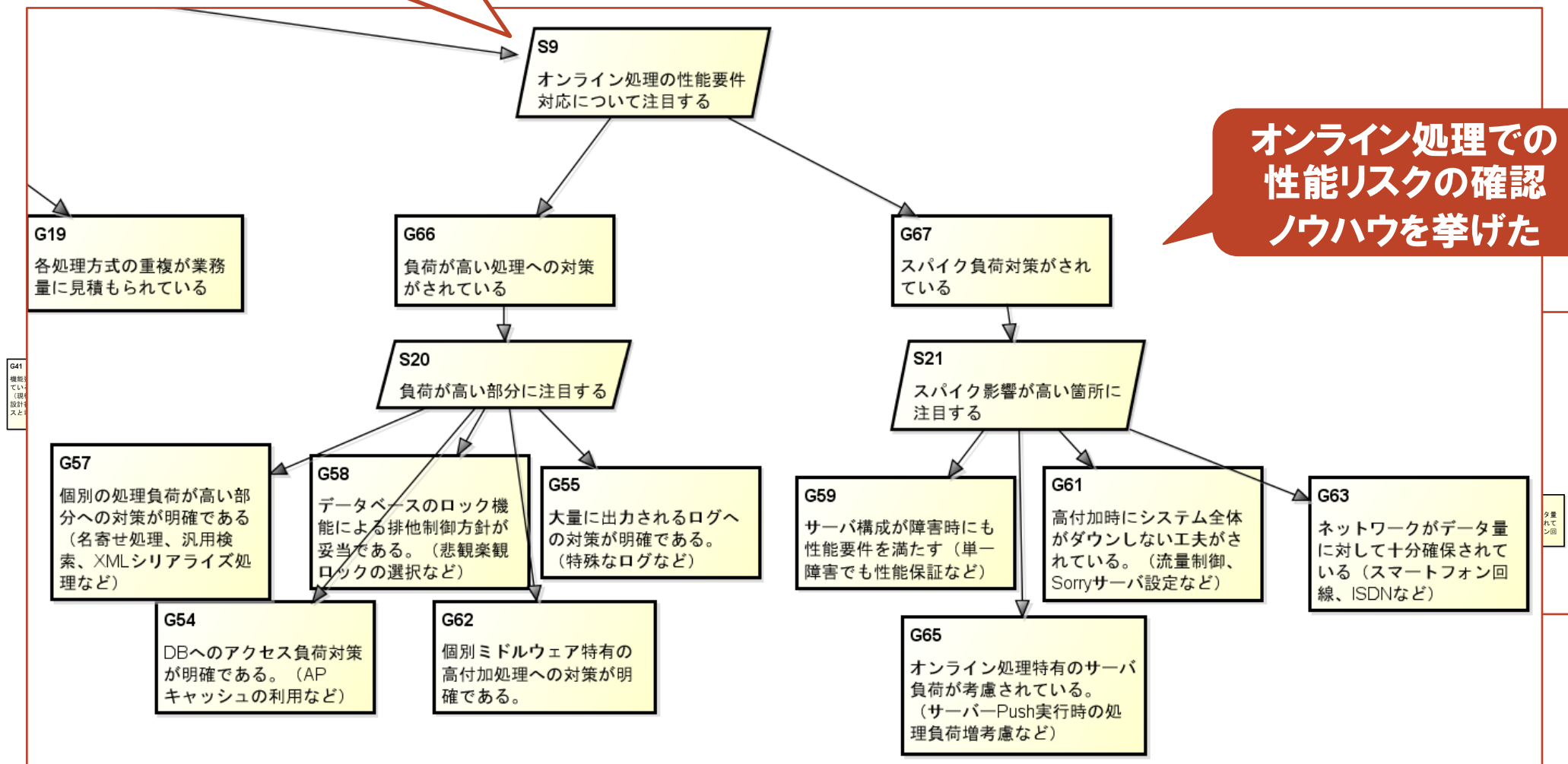
オンライン処理の構成に関して
定義・設計すべきことに分解した



オンライン処理の 性能要件対応に関する例

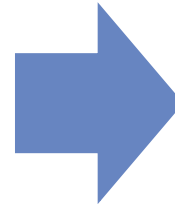
作成したD-Case

オンライン処理での
性能リスクの確認
ノウハウを挙げた



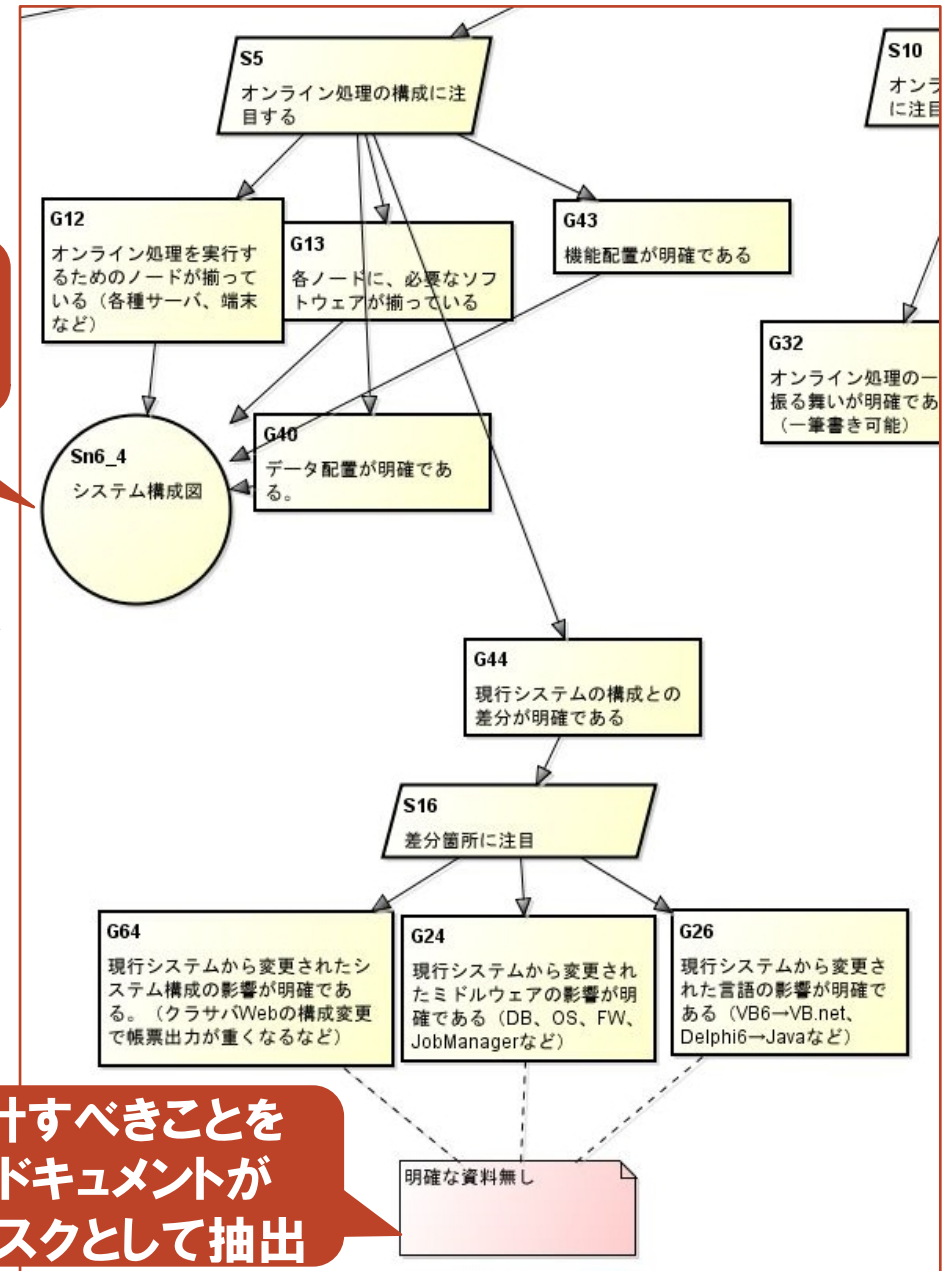
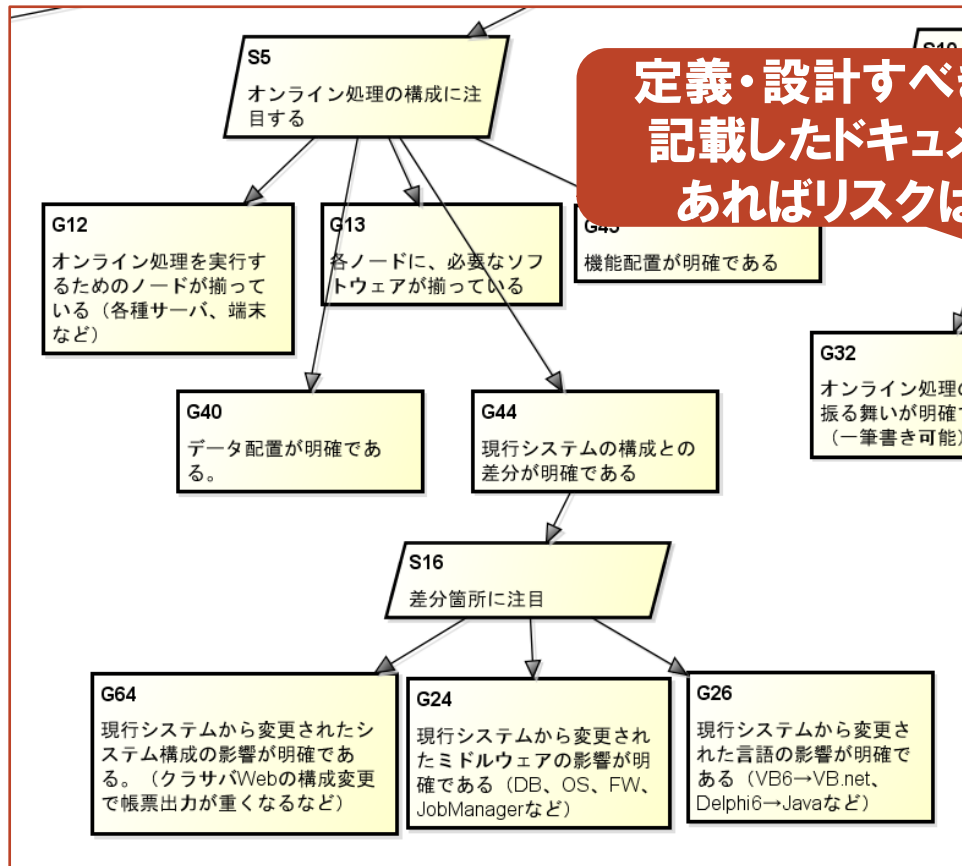
2.5 適用例(8/8)

定義・設計すべきことを
記載したドキュメントが
あればリスクはない



定義・設計すべきことを
記載したドキュメントが
なければリスクとして抽出

明確な資料無し





3. 今後の取り組み計画

期待する効果が出るかどうかを実プロジェクトで検証

実現したいこと

D-Caseでチェックの過程を可視化して蓄積

- ・ 複数のプロジェクトに対して: D-Caseを蓄積して過去のチェックノウハウを活用
- ・ 1つのプロジェクトに対して: D-Caseを使ってリスクへの対処の状況をモニタリング



期待される効果

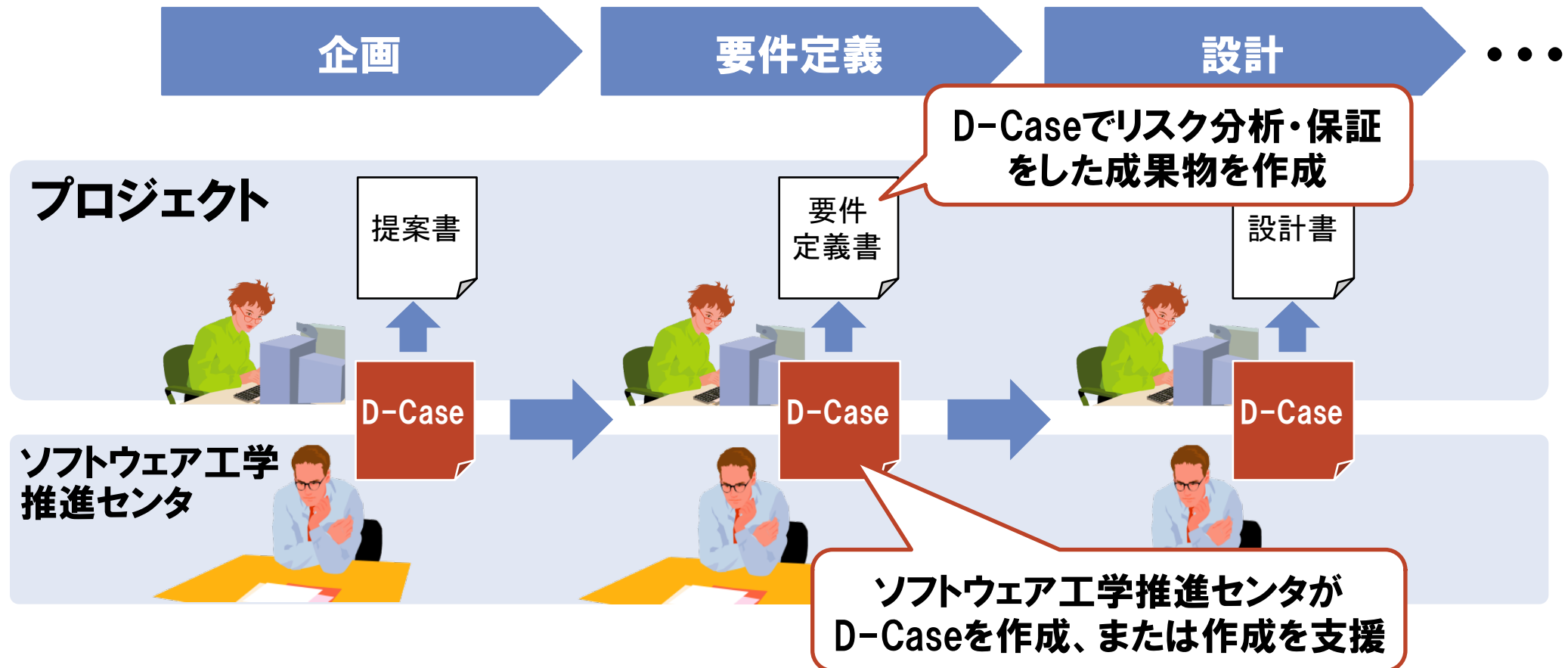
チェック効率の向上

D-Caseを作る工数が増えても、確認すべき観点や対象を見つけやすくなるため
チェック全体の工数は減る

チェック品質の向上

リスク抽出のための検証プロセスや考え方をD-Caseで形式知化することで、
今まで見逃していたリスクに気づける

開発作業の中で品質を確保するための活用方法を検討



対象としたいシステム: 社会インフラとなるシステム
対象としたい品質特性: セキュリティ(個人情報保護など)



NTT Data

Global IT Innovator